# 全教職員で主体的に取り組む学校保健活動を目指して

## ――　保健主事がマネジメントする「校内研修プログラム」の作成と活用を通して　――

長期研修員　　井堀　尊義

《研究の概要》

本研究は、全教職員で主体的に取り組む学校保健活動を目指し、保健主事がマネジメントする「校内研修プログラム」を作成し、活用した。子供たちの様々な健康課題がある中、教職員の意識の向上や保健主事の活躍が一層期待される。本プログラムは、保健主事資料とプレゼン資料を活用することで保健主事の役割を明確にした。ボトムアップの話合いにより、教職員の意識を高め、主体的に取り組めるようにした。また、A「課題」を共通理解する全体会、B「取組」を共通理解する部会、C「振り返り」・「今後の見通し」を共通理解する全体会を、実情に合わせて選択したり、組み合わせたりできる構成にした。本プログラムの活用により、全教職員で主体的に取り組む学校保健活動になることを実践を通して明らかにした。

キーワード　【学校保健　保健主事　校内研修　共通理解　ボトムアップ】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｅ０１－１０　平成３０年度　２６７集

## Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）は、現代的な諸課題に対応して求められる子供の資質・能力として、「健康・安全・食に関する力」を第一に挙げ、計画に基づいた実施体制を確保していくことが重要であるとしている。学校においては、全教職員による健康・安全・食に関する力を育成する学校保健活動の組織的な指導・支援体制の整備や、調整に当たる保健主事の活躍が求められるところである。

文部科学省『保健主事のための実務ハンドブック』（平成22年３月）には、学校保健活動は、組織的な取組が不可欠で、学校教育全体の組織構成や各分掌を踏まえて、連絡・調整を図ることが必要であると記されている。保健主事は、学校保健活動の調整に当たる教員として、全ての教職員が学校保健活動に関心をもち、それぞれの役割を円滑に遂行できるような働きかけをすることが期待されている。そして、学校保健活動に関わる施策や経営方針などを教職員に確実に伝える役割と、担当者の考えやニーズを生かしてまとめ上げていく役割をバランスよく担うことが望まれている。学校保健に関する組織活動推進のために、教職員が学校保健活動の認識を高めることが有効であると示している。保健主事が校長をはじめ校内研修の担当者等と連絡・調整をとり、学校保健に関する研修を位置付けることが重要であるとしている。

校内研修については、学校保健に関する研修として、食物アレルギーやAED等に係る研修は実施されている。一方で、健康課題を解決するための校内研修については、計画に位置付けられていない現状がみられる。

以上のことから、保健主事が学校保健活動の調整役を担い、健康課題の解決につながる校内研修を計画に位置付けることで、教職員が学校保健活動の意識を高める一助になると考える。

そこで、本研究では、「校内研修プログラム」を作成し、保健主事の役割を明確にしたいと考えた。また、ボトムアップによる話合いを取り入れた「校内研修プログラム」の活用によって、全教職員で主体的に取り組む学校保健活動にしたいと考え、本主題を設定した。

## Ⅱ　研究のねらい

全教職員で主体的に取り組む学校保健活動にするために、保健主事がマネジメントする「校内研修プログラム」を作成し活用したことは、有効であったか明らかにする。

## Ⅲ　研究内容

### １　基本的な考え方

#### (1)　「全教職員で主体的に取り組む」とは

校内研修全体会及び部会において、ボトムアップによる話合いを取り入れ、一人一人の意見を反映させながら取組を進めることで、教職員が課題意識を高め、全教職員で主体的に取り組む学校保健活動になると考える。

#### (2)　「学校保健活動」とは

学校保健は、「学校における保健教育と保健管理」をいう（文部科学省設置法第４条第12号）。

本研究においては、児童が健康な生活を送るために、全教職員で児童の健康課題を共通理解し、改善に向けて考え、取り組み、振り返る活動を学校保健活動と捉える。

#### (3)　「保健主事がマネジメントする」とは

文部科学省『保健主事のための実務ハンドブック』（平成22年３月）は、「保健主事のマネジメントは児童生徒を中心に学校全体を視野にして組織的に学校保健活動を推進し、組織的な成果や効率を高めることが目的となる」と示している。

本研究においては、保健主事が学校保健活動の推進のために、保健部員や養護教諭、栄養教諭と連携を図る調整役を担うこと。また、研修主任と連携し、校内研修のファシリテーターになることで、保健主事がマネジメントする学校保健活動につながると考える。

### (4)　「校内研修プログラム」とは

ボトムアップによる話合いを取り入れ、教職員一人一人の意見を反映させることによって、全教職員で主体的に取り組む学校保健活動へとつながるプログラムである。学校の実情に合わせて選択したり、組み合わせたりするために五つのパッケージにした。それらのパッケージを「校内研修プログラム」として整理した（図１）。また、保健主事がマネジメントする「すぐに使えるプレゼン資料」と「保健主事資料」、部会別協議で可視化する「ワークシート」を作成した。

#### ①　全体会　Ａ

全体会「Ａ１」と「Ａ２」は、「課題」を共通理解するパッケージである。学校経営方針を改めて確認し、学校保健活動の必要性を感じ、全教職員の意識を高められるよう構成した。「Ａ１」は、各学年で健康課題を話し合い、優先的に取り組む健康課題を共通理解する内容である。「Ａ２」は、全教職員で改めて健康課題を共通理解し、取組につなげられるよう構成した。

#### ②　部会　Ｂ

部会「Ｂ１」と「Ｂ２」は、「取組」を共通理解するパッケージである。児童の実態に合った取組や教職員が実現性の高い取組を考えることにより、主体的に取り組む学校保健活動になるよう構成した。「Ｂ１」は、学年・ブロック部会で取組を考え、共通理解することで、児童の実態に応じ、教職員同士の連携も図りやすい内容である。「Ｂ２」は、各種部会（校務分掌で配置された保健部や体育部等）で取組を考え、共通理解することで、全校で一斉に取り組むことが考えられる。

#### ③　全体会　Ｃ

全体会「Ｃ」は、全教職員で取組や児童の変容を振り返り、今後の見通しを共通理解するパッケージである。各部会の実践を全体で共有することで、全教職員で意欲的に取り組む学校保健活動につなげられるよう構成した。

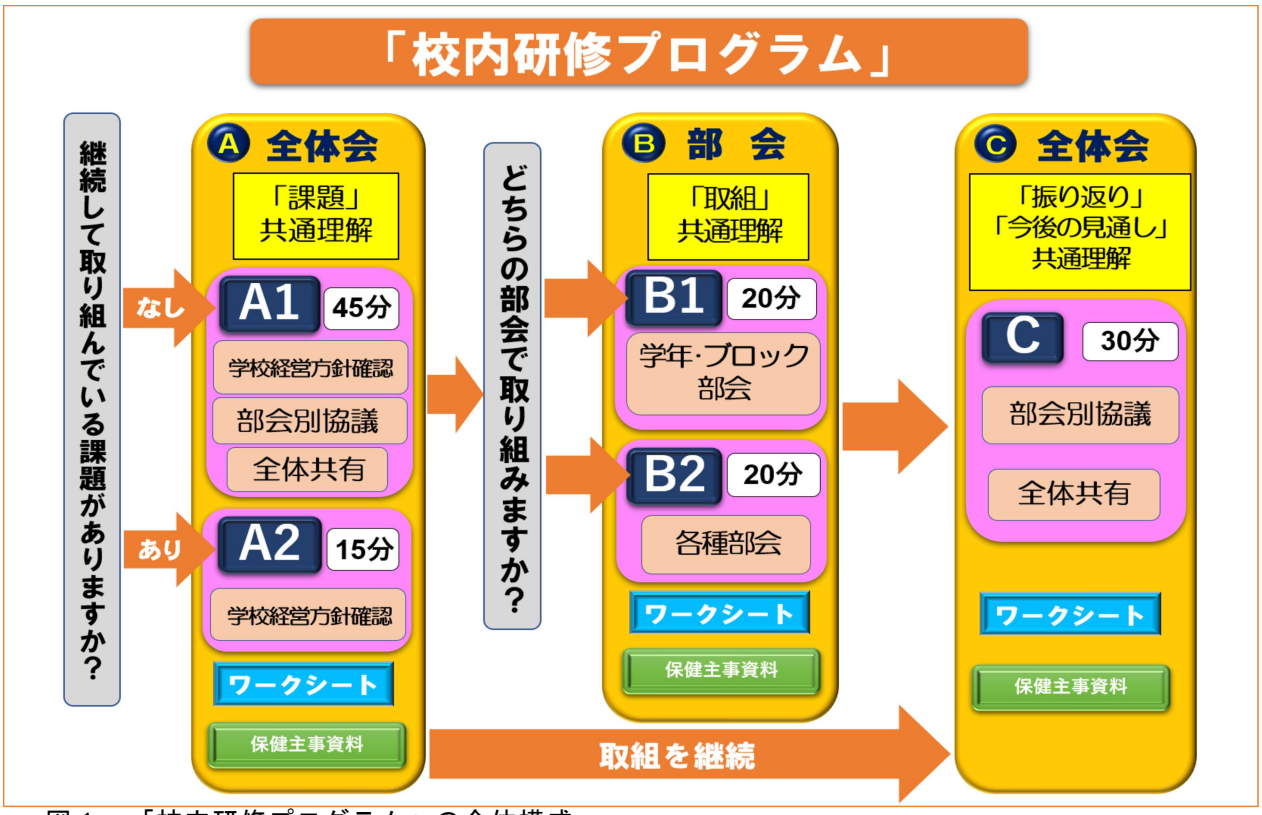
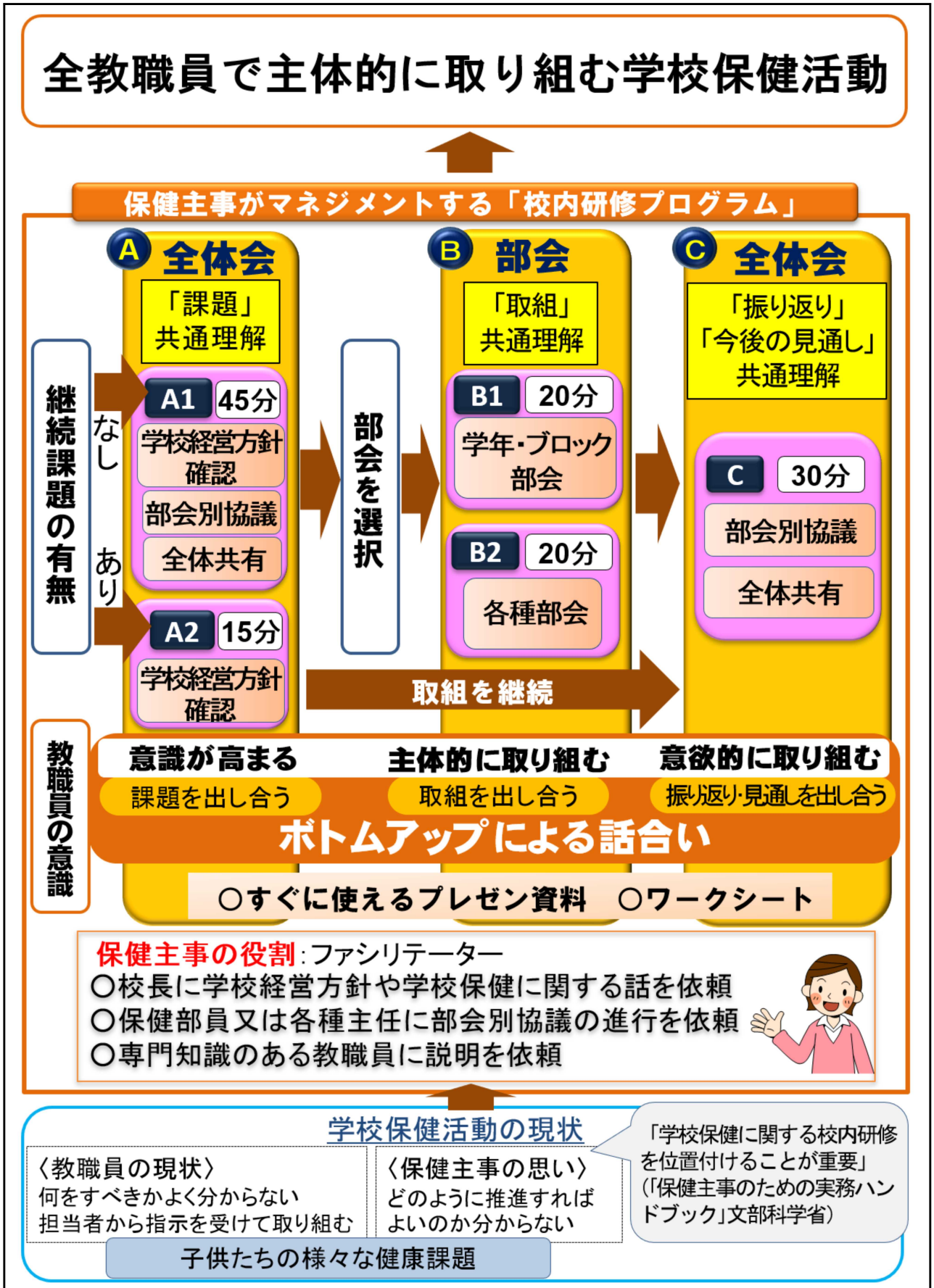



図１　「校内研修プログラム」の全体構成

２　研究構想図


全教職員で主体的に取り組む学校保健活動
保健主事がマネジメントする「校内研修プログラム」
A 全体会
「課題」共通理解
A1 45分
学校経営方針確認
部会別協議
全体共有
A2 15分
学校経営方針確認
継続課題の有無
なし
あり
部会を選択
B 部会
「取組」共通理解
B1 20分
学年・ブロック部会
B2 20分
各種部会
取組を継続
C 全体会
「振り返り」「今後の見通し」共通理解
C 30分
部会別協議
全体共有
教職員の意識
意識が高まる
課題を出し合う
主体的に取り組む
取組を出し合う
意欲的に取り組む
振り返り・見通しを出し合う
ボトムアップによる話合い
○すぐに使えるプレゼン資料　○ワークシート
保健主事の役割：ファシリテーター
○校長に学校経営方針や学校保健に関する話を依頼
○保健部員又は各種主任に部会別協議の進行を依頼
○専門知識のある教職員に説明を依頼
学校保健活動の現状
〈教職員の現状〉
何をすべきかよく分からない
担当者から指示を受けて取り組む
〈保健主事の思い〉
どのように推進すればよいのか分からない
「学校保健に関する校内研修を位置付けることが重要」（「保健主事のための実務ハンドブック」文部科学省）
子供たちの様々な健康課題

### ３　教材の概要

「校内研修プログラム」の五つのパッケージを、学校の実情に合わせて選択したり、組み合わせたりできるように作成した。また、他の研修や会議後でも実施できるよう短時間の構成にした。

**(1)　「校内研修プログラム」パッケージの組合せ例**

**○　健康課題の共通理解が図れていない学校**

「全体会Ａ１」＋「部会Ｂ１］＋「全体会Ｃ」の組合せで実施。健康課題を共通理解し、学年・ブロックで取組を計画的に進め、振り返りを全体で共有する。

**○　健康課題を共通理解している学校**

「全体会Ａ２」＋「部会Ｂ２」＋「全体会Ｃ」の組合せで実施。健康課題を確認し、全校で一斉に取組を進め、振り返りを全体で共有する。

**○　健康課題を共通理解し、積極的に取り組んでいる学校**

「全体会Ｃ」を選択して実施。取組を継続し、振り返りを全体で共有する。

**(2)　実施時期の例**

「全体会Ａ」及び「部会Ｂ」は、新年度や学期の初め、児童の健康診断後に実施。「全体会Ｃ」は、健康課題を改善するための取組を継続して実践した後、学期末や年度末に実施する。

## Ⅳ　研究の計画と方法

### １　実践の概要

研究協力校（以下、協力校）では、「全体会Ａ１」と「部会Ｂ１」、「全体会Ｃ」を組み合わせて実践した。

**(1)　全体会Ａ１**

| 対　象 | 実践日 | ねらい |
|---|---|---|
| 協力校教職員 | 平成30年８月31日（金） | ○児童の健康課題について、全教職員で共通理解する。<br>○校内研修を通して全教職員で意識して学校保健活動に取り組もうとする。 |

**(2)　部会Ｂ１**

| 対　象 | 実践日 | ねらい |
|---|---|---|
| 協力校教職員 | 平成30年９月７日（金） | ○児童の健康課題を改善するために、学年・ブロック部会で取組を考え、共通理解する。<br>○校内研修を通して主体的に学校保健活動に取り組もうとする。 |

**(3)　全体会Ｃ**

| 対　象 | 実践日 | ねらい |
|---|---|---|
| 協力校教職員 | 平成30年11月５日（月） | ○実践した取組を振り返り、今後の見通しを全教職員で共通理解する。<br>○校内研修を通して全教職員で意欲的に学校保健活動に取り組もうとする。 |

### ２　検証計画

| | 検証の視点 | 方　法 |
|---|---|---|
| 全体会Ａ１ | 全体会で、児童の健康課題を共通理解したことは、全教職員で意識して学校保健活動に取り組むことに有効であったか。 | ○実践の観察、発言の内容<br>○ワークシートへの書込み<br>○研修後のアンケート（資料編①）<br>○聞き取り（保健主事、養護教諭） |

| | | |
|---|---|---|
| 部会<br>Ｂ１ | 児童の健康課題を改善するための取組を学年・ブロック部会で考え、共通理解したことは、教職員が主体的に学校保健活動に取り組むことに有効であったか。 | ○実践の観察、発言の内容<br>○ワークシートへの書込み<br>○研修後のアンケート<br>○聞き取り（保健部員、養護教諭、栄養教諭） |
| 全体会<br>Ｃ | 全体会で、実践した取組を振り返り、今後の見通しを共通理解したことは、全教職員で意欲的に学校保健活動に取り組むことに有効であったか。 | ○実践の観察、発言の内容<br>○ワークシートへの書込み<br>○研修後のアンケート<br>○聞き取り（校長、教頭、保健主事、養護教諭） |

## ３　実践

### (1)　実践１「全体会Ａ１」

#### ①　実践の対象

○　実践日：平成30年８月31日（金）

○　協力校：教職員33名

○　ファシリテーター：保健主事

#### ②　実践の展開

| 研修の内容 | 時間 | 保健主事の留意点 |
|---|---|---|
| １　保健主事による健康課題の説明 | ７分 | ○「すぐに使えるプレゼン資料Ａ１」（資料編②）に沿って進める。<br>○全体会が和やかな雰囲気になるよう「学習指導要領」に示された健康教育に係る内容と自校の学校経営方針をクイズ形式で確認する。 |
| ２　アイスブレイク | ７分 | ○「ワークシートＡ１」（資料編③）を活用し、アイスブレイクによって気持ちをほぐし、話合いをしやすい雰囲気にする。<br>○教職員自身の健康を見直し、学年の教職員と伝え合う。 |
| ３　養護教諭による自校の健康課題に係る説明 | ２分 | ○「保健主事資料Ａ１」（資料編④）を活用して、事前に依頼した養護教諭に、説明をしてもらう。<br>○養護教諭が、自校と県、国の肥満傾向児出現率を比較しながら説明し、教職員が健康課題を捉えやすいようにする。 |
| ４　個人で考える<br>付箋を使って､児童の健康課題を書き出す。 | ３分 | ○短時間で気になる児童の様子を書き出せるよう、「保健主事資料Ａ１」を活用して朝の様子や休み時間、給食時間の様子を思い出すよう全教職員に声をかける。 |
| ５　グループ（学年）で健康課題を絞り込む | 12分 | ○養護教諭と栄養教諭が各学年を回り、アドバイスをする。養護教諭は、保健室へ来室する児童の様子を伝える。 |

| | | |
|---|---|---|
| | | 栄養教諭は、給食残量のデータを担任に伝える。 |
| ６　全体で共有する | ８分 | ○ボトムアップを意識し、若手教員が学年の健康課題を発表し、全教職員で共通理解できるようにする。<br>○「保健主事資料Ａ１」を活用して事前に依頼した、養護教諭・体育主任・栄養教諭からそれぞれの立場で健康課題を発表してもらい、課題を明確にし、取組につなげるようにする。栄養教諭は、給食の残量等について、体育主任は、体力テストデータ等を伝える。 |
| ７　保健主事によるまとめ | １分 | ○全体会を振り返り、共通理解したことや次回の部会の内容を伝える。 |

(2)　実践２「部会Ｂ１」

①　実践の対象

○　実践日：平成30年９月７日（金）

○　協力校：中学年部会７名、養護教諭、栄養教諭

○　ファシリテーター：保健部員

②　実践の展開

| 研修の内容 | 時間 | 保健部員の留意点 |
|---|---|---|
| ①個人で考える | ５分 | ○「すぐに使えるプレゼン資料Ｂ１」（資料編⑤）に沿って進める。<br>○健康課題を改善するための具体的な取組案を個人で考え、付箋に書くことを伝える。 |
| ②学年・ブロックで考える | 20分 | ○保健部員は、「保健主事資料Ｂ１」（資料編⑥）を活用して、「ワークシートＢ」（資料編⑦）に着手容易性と効果を観点に、付箋を貼っていく。 |
| ③取組を決める | 10分 | ○付箋を整理しながら、話合いを進め、取組を決める。 |

(3)　実践３「全体会Ｃ」

①　実践の対象

○　実践日：平成30年11月５日（月）

○　協力校：教職員33名

○　ファシリテーター：保健主事

②　実践の展開

| 研修の内容 | 時間 | 保健主事の留意点 |
|---|---|---|
| (1)学年<br>①「児童の変容」と「オススメの取組」を振り返る<br>②「今後の見通し」を確認する | 20分 | ○「すぐに使えるプレゼン資料Ｃ」（資料編⑧）に沿って進める。<br>○保健主事が、「ワークシートＣ」（資料編⑨）の書き方について「保健主事資料Ｃ」（資料編⑩）を活用し、説明する。 |

| | | |
|---|---|---|
| | | ○児童の変容、オススメの取組、今後の見通しについて、各学年の保健部員が進行し、「ワークシートＣ」を活用して話し合うことを伝える。<br>○養護教諭は各学年を回り、保健室に来室する児童の様子を伝える。<br>○「保健主事資料Ｃ」を活用して、各学年を回り、オススメの取組と今後の見通しを確認しながら、発表準備を促す。 |
| (2) 全体<br>①「オススメの取組」と「今後の見通し」を発表する<br><br>②校長が学校保健活動を振り返り、講評する | 10分 | ○ボトムアップを意識し、若手教員がオススメの取組と今後の見通しを発表し、全教職員で共通理解できるようにする。<br>○「保健主事資料Ｃ」を活用して、事前に依頼した校長に講評をしてもらう。 |

## Ⅴ　研究の結果と考察

### １　全教職員で「課題」を共通理解し、意識して取り組むこと

実践１（全体会Ａ１）で各学年から出された「健康課題」をまとめた（表１）。１、２学年は食に関することで共通していた。３学年は肥満傾向、４、５、６学年については、体を動かしていないことが、共通の課題であった。教職員は、日常の児童の様子や全体会で養護教諭が示したデータを基に考えていることが分かった。実践後に教職員へ実施したアンケートの結果を示した（表２）。

表１　各学年から出された健康課題

| 学年 | 共通理解した「課題」 |
|---|---|
| １年 | 偏食が多い |
| ２年 | 偏食の児童が多い |
| ３年 | 肥満傾向 |
| ４年 | 休み時間に体を動かしていない |
| ５年 | 体を動かして遊ぶ児童が少ない |
| ６年 | 運動不足 |

表２　取り組む意識が高まることに係る記述

| 回答者 | 記述 |
|---|---|
| 教職員 | ○校内研修で健康教育の内容について協議するのは初めてだった。高学年の発表を聞くことができて参考になった。<br>○学習指導要領や経営方針、本校や県の実態など全体で共有することができた。<br>○全員参加のワークショップ形式は意識を高める上で有効である。 |
| 保健主事 | ○校内研修に位置付けることで多くの先生方の意見を聞き、学年の課題が明確になった。<br>○教職員が目的意識をもって取り組むことで児童に伝わりやすい。 |

表２から、全体会で、学習指導要領や学校経営方針を確認でき、全教職員で共通理解を図れたことが示された。全員参加のボトムアップを取り入れた話合いをすることで、学校保健活動への意識が高まったことが示唆された。

以上のことから、全体会において、健康課題を共通理解したことで、教職員一人一人の健康課題改善への意識が高まったと考えられる。保健主事は研修主任や養護教諭、栄養教諭に相談し、保健部員に連絡した上で全体会を開くなど、きめ細かな調整を進めながらマネジメントしたことで効率的に実施できたことが分かった。学習指導要領や学校経営方針、養護教諭から出されたデータを基に全体会を進めたことで教職員が同じ方向性で取り組めたと考えられる。また、養護教諭や栄養教諭、体育主

任の話を聞き、教職員は学級の児童の実態と共通していることに、納得した様子であった。このことから、教職員は、日頃から感じていた児童の健康課題を確認し、健康課題の共通理解を図る一助になったと考えられる。学年で健康課題を絞り込む場面では、普段から思っていた学級の実態と他学級の様子に一致する部分が多いことに共感し、活発な意見交流をしていた。全体で共有する場面では、学年・ブロックで共通する課題が多く、課題を共通理解することで取組を考える意識が高まったと考えられる。

### ２　学年・ブロックで「取組」を共通理解し、主体的に取り組むこと

実践２（部会Ｂ１）学年・ブロックで考えた「取組」をまとめた（表３）。

**表３　学年・ブロックで考えた取組**

| 学年 | 取組 | 取組 | 取組 |
|---|---|---|---|
| １、２年 | 親子給食試食会・生活科 | 栄養教諭による給食指導 | |
| ３、４年 | 休み時間の運動啓発 | 学年で統一した補強運動 | 栄養教諭による給食指導 |
| ５、６年 | 担任と一緒に外遊び | 栄養教諭による給食指導 | |

学年・ブロックで協議したため、ブロックで共通した取組になった。新たな取組ではなく、休み時間に担任が外に出て一緒に遊ぶことや生活科で食育を意識するなど、実現性の高い取組が考えられた。

実践後に教職員へ実施したアンケートの結果を示した（表４）。

**表４　主体的に取り組むことに係る記述**

| 回答者 | 記述 |
|---|---|
| 教職員 | ○日常、学級で取り組んでいる活動を学年又は、ブロックでの共通課題として話し合えたことがとても有意義だった。<br>○学年で共通の課題を考えることができた。共通理解の下、方向性を同じにして実践することはとてもよいと思う。 |
| 保健主事 | ○学年でグループになるのはよい。学年だと考えやすい。保健部員と学年主任が協力していた。 |

表４から、学年・ブロックで部会を開き、共通課題として話し合えたことで、教職員が同じ方向性で実践できたことが分かった。ボトムアップを取り入れたことにより、教職員一人一人の日常の取組が話合いに反映され、教職員が主体的に学校保健活動に取り組めたことが明らかになった。また、実践の様子から、部会Ｂ１では、担任が工夫している普段の取組が数多く書かれていた。養護教諭は、各担任が考えることにより、主体的な取組につながると記述していた。栄養教諭が参画したことで、学年から保護者向けの講話を依頼する場面も見られた。一方、付箋を使って取組を考えたが、具体的な取組を書くことが難しく、設定した時間より長くかかったので、参加者が具体的な取組を記入しやすい「取組カード」（資料編⑪）に改善する必要があることが実践を通して明らかになった。

### ３　全教職員で実践の「振り返り」と「今後の見通し」を共通理解し、意欲的に取り組むこと

実践３（全体会Ｃ）で各学年から出された「児童の変容」「オススメの取組」「今後の見通し」をまとめた（表５次ページ）。「取組」の実施期間が短かったが、教職員は児童の変容を共通理解することができた。１、２学年は、給食の配膳を工夫したことが、効果的な取組であったと発表した。３学年から６学年は、休み時間に児童が体を動かすために、担任が工夫したことや学級活動で児童が考えたイベント係の取組などが効果的であったと紹介した。また、全体会に栄養教諭が参画したことで、給食指導の具体的な内容や日程をその場で相談する場面も見られた。

表５　各学年から出された「児童の変容」「オススメの取組」「今後の見通し」

| | 児童の変容 | オススメの取組１ | オススメの取組２ | オススメの取組３ | 今後の見通し |
|---|---|---|---|---|---|
| １年 | 苦手なものでも少しずつ食べられるようになった | 親子給食試食会で栄養教諭が家庭に向けて話をする | 苦手なものを最初に減らす | 栄養教諭による給食指導 | ○実態に合わせた栄養教諭の指導<br>○給食試食会後の保護者への話 |
| ２年 | 完食の喜びを感じる児童が増えた | 担任がおかずの量を調整して配膳する | 量を減らして一口は食べる | 生活科で育てたものに感謝 | ○紙芝居「いのちをいただく」の読み聞かせ（食育） |
| ３年 | 積極的に外に出るようになった | 行事と関連付けて運動を推進する | 栄養教諭から話をする（公開日） | 個別指導（保護者と養護教諭、栄養教諭の連携） | ○目的をもたせて外に出る<br>○栄養教諭の話（テーマを相談する） |
| ４年 | 外に出て体を動かす児童が増えた | 授業と関連付けてクラス対抗の運動を計画する | 行事に向けて、目的意識をもたせて休み時間を過ごした | 担任も一緒に体を動かし、児童へ励ましの声をかける | ○目的意識をもちながら、休み時間に楽しく体を動かす工夫 |
| ５年 | 休み時間、教室にいる児童が減った | 休み時間、外に出るよう声をかけ、電気を消す | イベント係がクラスで遊ぶ機会をつくった | 体育の課題とつなげて外でできることを提示 | ○校内長縄大会を利用して学級で外に出て練習<br>○学年で課題を設定してチャレンジ |
| ６年 | 児童同士が声をかけ合い、外で活動するようになった | 教室で声をかけ、外に出るよう促す | 担任も外に出る | 行事と関連付けて活動 | ○学年、同一歩調で声をかける<br>○児童同士で声をかけ合う |

実践後に教職員へ実施したアンケートの結果を示した（表６次ページ）。

表６から、以前は養護教諭を中心に学校保健活動を進めていたが、本研究で提案した「校内研修プログラム」の活用で、担任が学級や学年の実態に合った実践ができるよさに気付き、意欲的に取り組もうとすることが記されていた。健康教育の大切さを再認識し、児童に対する指導・支援を改善しようとする記述も見られ、今後も主体的に学校保健活動を推進する意欲が高まったと考えられる。保健主事の記述からは、養護教諭との連携など、保健主事の役割を見直す必要性を感じていることが読み取れ、意欲的に学校保健活動をマネジメントしようとすることが分かった。協力校の保健主事は、「すぐに使えるプレゼン資料」や「保健主事資料」で示された事前準備に加え、研修前に全教職員に「ワークシート」を配付した。校長、教頭の記述から、保健主事が研修主任と連携を図りながら、学校保健活動を校内研修において取り組むことで、教職員の主体的な取組につながることが示された。実践の様子から、全体会Ｃにおいて、担任は日常の取組で効果が表れたことを児童の様子を伝えながら発表していた。学年別協議では、担任が工夫している普段の取組に対し、活発な意見交流をしていた。

表６　全教職員で意欲的に取り組むことに係る記述

| 回答者 | 記述 |
|---|---|
| 教職員 | ○校内研修では学習に関することが多く、今回のように健康教育・児童の課題について考察することがあまりなかったので、このような研修も必要だと改めて感じた。健康な体や心があって、学習や生活が充実したものになると思うので、児童の健康についても気を配っていきたい。<br>○学校保健活動というと保健の先生が中心になって私たちも一緒に取り組んでいくイメージだった。しかし、研修で私たちからも学級の子や学年の子たちに働きかけできることが身近にあることが分かり、勉強になった。子供たちを指導していく上で、保健指導も少し力を入れていきたい思う。<br>○保健活動は子供たちにとって大切なことだとは分かっていても、つい後回しになって実践に結び付かないことが多いので、研修として位置付けることは大切だと思う。<br>○これまで保健関係の仕事は自分ではあまりせず、養護の先生にやっていただくことが多く、お願いしていた。研修を通して保健教育の大切さを改めて学ぶことができた。 |
| 保健主事 | ○保健主事の仕事が分からなかったが、校内研修の中で進行役をしたり、保健部の先生方に手伝ってもらったりする中で、保健主事の仕事の大切さが分かった。 |
| 校長教頭 | ○保健主事を中心に保健担当が具体策案の核となり活動できていた。学年会等で短時間で話合い、共通理解を図りながら学年や発達の段階に応じた手立てを企画することができていた。<br>○保健主事が研修主任と連携しながら健康教育を進められることで、効果が表れた。また、教職員一人一人の校内研修や健康教育に取り組む姿を見ることができた。<br>○このような会を開くことで、本校の学校保健に取り組む意識が高まると共に研修の中で話し合う活動を通して教職員のコミュニケーション力や学年ごとの発表（若手が頑張りました）により全校で考えが共有できたのがよかった。<br>○いろいろ取り組むことが多いので、研修に取り込むことで意識の高揚を図るにはよいこと。意識が高まることにより、取組も当然主体的になった。<br>○改めてみんなで見直して課題を見付け、さらに、よい取組を確認することで効果的な指導が広がると思う。日常的に取り入れることで、教員の指導力向上につながる。 |

若手教員が発表する場面では、教職員の温かくにこやかな表情で見守る姿が見られた。栄養教諭による保護者向けの講話について、情報交換したことで、栄養教諭が学校保健活動に参画する機会も増えた。以上のことから、全教職員で健康課題や取組、今後の見通しを共通理解することで、主体的な学校保健活動につながったと考えられる。一方で、全体会Ａ１、部会Ｂ１、全体会Ｃで使用したそれぞれの「ワークシート」は、内容が重なる部分があることから、全体会Ａ１から全体会Ｃまでを可視化し、学年で取組の方向性を確認できる、「ワークシートＡＢＣ」（資料⑫）に改善することも有効な手立てになると考える。全体会Ｃ後、教職員33名にアンケートを行った。「以前より学校保健活動に主体的に取り組めたか」の問いに対し、「よくできた」と答えた教職員が36％、「できた」63％だったことから、学校保健活動に、教職員が主体的に取り組めたと感じていることが分かった。「学校保健活動を校内研修として取り組むことは有効か」の問いに対し、「とても有効だ」53％、「有効だ」46％と答えていることから、学校保健活動を校内研修で取り組むことは有効だと感じていることが分かった。

以上の結果から、「校内研修プログラム」の活用によって、保健主事は、校長と相談した上で、研修主任をはじめとする教職員と連絡・調整を図り、学校保健活動に関わる経営方針などを教職員に伝えることができた。さらに、保健部員や養護教諭等と連携を図りながら、教職員の考えを生かしまとめ上げ、全教職員で主体的に取り組む学校保健活動につなげることができた。

## Ⅵ　研究のまとめ

### １　成果

○　「校内研修プログラム」を活用したことで、保健主事の役割が明確になり、全教職員で取り組む学校保健活動につながった。

○　保健主事が教職員ときめ細かく連携を図り、校内研修を進めたことで、教職員一人一人の児童の健康課題改善への意識が高まった。

○　教職員が健康課題を共通理解し、課題解決のために実現性の高い取組を考えたことで、主体的な学校保健活動につながった。

### ２　課題

○　教職員が見通しをもって、学校保健活動を推進するために、「校内研修プログラム」の全体構想を示す必要がある。

○　教職員が考えた取組が、児童の主体的な活動につながるよう、「校内研修プログラム」のパッケージを工夫する必要がある。

## Ⅶ　提言

学校教育課題を解決する上では、全教職員で共通理解を図ることが大切である。保健主事が推進する「校内研修プログラム」を全教職員で共通理解を図った上で、課題を解決していくことにより、健康教育の一層の充実が期待できるであろう。

＜参考文献＞

・文部科学省　『保健主事のための実務ハンドブック』　　(2010)

・独立行政法人教職員支援機構　『教職員研修の手引き2018－効果的な運営のための知識・技術－』(2018)

・財団法人日本学校保健会　『保健主事実践事例集－保健主事のためのマネジメント事例集－』(2012)

・財団法人日本学校保健会　『学校保健委員会マニュアル』　　(2000)

＜担当指導主事＞

須藤　和恵　　中村　崇